

岡村 智晴

一九八四年、名古屋生まれ。二〇〇八年、東京藝術大学を卒業。団体には所属せず、個展、グループ展を中心に活動。会場では「光」をテーマとした新作三点を出品。茶の湯などの伝統文化と現在の感覚を融合した形状の作品を制作している。二〇一八年にはニューヨークで「用の美」をテーマに個展を開催。

青山 一九八四年生まれ、現在三十三歳です。ご出身が名古屋で、今も名古屋で制作しています。いつごろから絵を描きたいと思うように？

岡村 最初に絵を描きたいと思ったのは幼少期のころです。姉が絵画教室に通っていて、それを見て自分も描いてみたいと思って始めました。

青山 お姉さまも画家ですか？

岡村 いえ、違います。続けたのは自分だけでした。

青山 では小さいころから画家になりたいという夢を？

岡村 具体的に画家になりたいというわけではなかったんですが、大学に進学するにあたって、美術の道を、物をつくりたいという想いがあったので、美術の道を目指しました。

青山 高校で美大への進学を意識した選択を？

岡村 中学の頃から美術予備校に通い、本格的に大学の受験ということで、少し遅め



なんですけど、また美術予備校に高三の夏期講習から通いました。そこから二年、浪人生活を送り、大学に進学しました。

青山 東京藝大は最難関というイメージがありますが、目指した理由は？

岡村 芸術の最高学府であるのと、一番を目指したかったので、必然的に東京藝大を選びました。

青山 藝大でどなたか先生や先輩など影響を受けた人はいますか？

岡村 美術予備校のころから院展の作家の高島圭史先生の作品をよく見ていて、在学中に講師としていらつしゃったので、近くで拝見できる機会があったのはすごくありがたかったです。他にも、達人のような先生方がいらして近くで拝見できる機会がありました。と思いました。

青山 大学進学時に日本画を選ばれた理由は？

岡村 作品を拝見したのは予備校に入ってからなので、それまでは日本画というものになじみがなくて、絵画教室の先生も油絵の先生でした。まず日本画の「日本」というキーワードが入っていたのにすごく興味をひかれて、選択したという感じですね。物がつくれたらいいなという気持ちがあったので、彫刻、デザインと色々迷いましたが、その中から日本画を選びました。

青山 では最初から日本画というよりは、ものづくりがしたいという中で、何となく興味をひかれていったんですね。ご自身は大学で学んでから、地元に戻られました。東京で学ぶとそのまま東京に進学したり、向こうで腰を据えて活動する方も多いと思いますが、地元に戻ったのは何か理由が？

岡村 すごく個人的なことですけども、祖父と父が続けて他界したので、名古屋に帰ろうと。結婚を機会に名古屋に帰り、制作することになりました。

青山 知り合いの美術大学で教えている人が言うには、教え子の若い方が美術や制作で食べていこうとするのは、ものすごく孤独でハードルが高いことだと。制作一本とというのは、すごく勇気のいることだと思うのですが。

岡村 大学に入ってすぐに美術で、絵一本でやっていこうという思いがあつて。同級生とはそんな無理だという話もあつたのですが、自分では何となくできる気がしていたので、それが向いているというか、そんなに違和感なく続けられました。

青山 すごい。やはり精神的な強さみたいなものが伝わります。

岡村 もちろん精神的に強いほうとは言い切れないので、自分の中では振れながらも、その道でやっていこうと決めたからには、できることを一つ一つ、目の前のことを形にしていこうとすることを続けた結果、対価をもらつたり、こうして展覧会で発表させていただいたりとか、目の前のことをやっていくことが一番の近道だと思っています。

青山 高島先生は院展の先生ですが、公募展に参加することは考えませんでしたか？

岡村 もちろん、考えましたが自分に向いてないということで、無所属で活動していません。

青山 それでは制作のテーマについて。ずっと「光」をテーマに制作を続けています。何かきっかけは？

岡村 形のないもので、ありふれたものをフラットに描きたいなと思うなかで、テーマを探していたところ、時間とか時代を超えられるものということで二〇〇八年から

「光」をテーマに制作をスタートしました。

青山 「光」をテーマにまずはじめに生まれたのが「木漏れ日」という作品のシリーズですね。ここでは白いシールを貼ったガラスケースのところに展示しています。

岡村 「木漏れ日」シリーズとして描き始めたのは二〇〇八年からです。形ないものをテーマに描きたいというところから描きました。二〇〇九年の十一月に東京美術倶楽部でデビューとなる展覧会があり、そこに出品するにあたって《木漏れ日》を描いていたのですが、展覧会の一週間前に父が他界しまして、すごく自分の心がくじけそうになる中で、街の中で見た木漏れ日の光がそういったマイナスのイメージを浄化するような感じがしたので、そうした光の現象、『北風と太陽』の太陽のような心の闇を払拭するような光の現象を描きたいと思って《木漏れ日》を描いています。その時の気持ち風化しないように、ライフワークとして、今でも描き続けているテーマになります。

青山 世界の捉え方の中で、「光」はご自身にとって自分を励ましてくれる存在と感じ取ったのでしょうか？

岡村 そうですね。何気ない風景がその一瞬で全く別の見え方をしたので、当たり前の風景が別の感覚を呼び起こさせるような、そういう作品をつくりたいと思っています。

青山 作品を見たときに前面の葉っぱの向こうから光がさしてくるのですが、それと同時に葉っぱそのものもきらきらと輝いて、複雑な光を見せているのにびっくりするんですね。これは普通の岩絵具ではないですよ？

岡村 岩絵具ではなく、銀箔を着色した色箔と呼ばれるものを用いています。一枚一枚は十一センチ角のいわゆる銀箔ですが、それを細かく三ミリぐらいの大きさに砕いて、色を混ぜ込んで描いているので、スーラの点描のようなイメージで光を表現できればと思って描いています。

青山 金属の箔は、日本画で伝統的に使われている膠という接着剤で、画面につけるのが難しいと思います。技術的には大変ではないですか？

岡村 膠だけではなく、今新しい素材もどんどん出てきているので、現代だからこそできる技術も自分の中で試しながら制作しています。

青山 銀箔だけでなく、他の箔も使っていますか？

岡村 アルミを着色したものとか、金属によって軽さや柔らかさが違うので、表現したいものに合わせて使い分けています。

青山 《木漏れ日》は屏風の形ですが、額のタイプもありますよね。「木漏れ日」シリーズでは正方形の画面を選ばれているものが多いと思いますが、何か意図していますか？

岡村 意図して正方形にしています。画面全体でオールオーヴァーに見えてくるようにしたかったので、まず規格のFとかPとかMとか、それぞれ人物画や海を描くのに合わせたサイズがあるんですけども、そこに収まらない規格で構図をつくっていきかけたので、そういった形と光を表現するためにスクエアを選択しています。

青山 これは緑の美しいタイプの絵ですが、午後の太陽を思わせるようなオレンジがあった作品もあります。やはり時間なども意識しながら色を選んでいますか？

岡村 今は庭に植えている紅葉の絵を描いています。より身近に感じられる植物の日々の変化、季節の変化を観察しながら、その時その時感じるものに画面が呼応するように意識して描いています。

青山 《流転》は黒いシールで囲っている作品です。ディスプレイの白黒は岡村さんからの提案で、陽と陰、光と影、明と暗の組み合わせを意識しています。木漏れ日が太陽の光であれば、流転は月の光。月の満ち欠けをテーマとしたのが「流転」シリーズと聞いています。こちらを始めたきっかけは？

岡村 先ほどの太陽の作品は父の死とか、負のイメージをもとに制作を始めたのですが、こちらは家族が生まれたので、それをきっかけに生命を感じるような慈しみのあるものをつくりたいと思って、時間を感じるものをつくったのが「流転」シリーズです。

青山 海の上に浮かんでいる月とか、月が満ち欠けしているような作品もあるのですが、「木漏れ日」とはまた違った視点からの光のイメージですね。

岡村 太陽の光が月に反射して見えているということで、同じ太陽の光ですが、一物質をクッションすることで我々に与える視覚的变化を描いています。

青山 この《流転》には岐阜県の誇る世界遺産、本美濃紙を使用しているそうですね。

岡村 月の白い部分に本美濃紙の白い部分を活かして描いています。

青山 影の部分はどのように？

岡村 紙の裏から彩色して、裏から少し紺色の色が透けるようにしています。

青山 この「裏彩色」は日本画の伝統的な彩色の方法ですよ。例えば絹の裏から朱

をあてて、表から白をあてて肌色を表すなど、そうした伝統的な彩色を意識したところはありますか？

岡村 はい。おっしゃるとおり、伝統的な彩色を意識しています。この作品の場合は表面に細かく砕いた金泥、金を着色しているので、その発色をよくするために。最初は補色の紫を入れていたのですが、今回は少し浮遊感を出すために紺色を使っています。見せたい表情に合わせて彩色の方法も変えています。

青山 これは風炉先屏風というお茶に用いる屏風の形です。お茶人を意識していますか？

岡村 最初は風炉先屏風という形態がすごく美しいと思ったので、そこからスタートしました。お茶道具を使っていく中で、現代のお茶人、IT企業に勤めながらお茶をされている方と交流するようになりました。

青山 伝統文化との接点も面白いです。過去と未来をつなげるような作品で、ぜひみなさんに紹介したいと思いました。次は《orbit》です。orbitは軌道という意味ですが、これは宇宙をイメージした作品です。中央に走っている線は人間の目には見えない宇宙の光のイメージとあっていいのでしょうか。

岡村 軌道なので、星だとか原子だとか、その場には留まらないものですが、私たちの抽象体の中で見えてくるそういったものを描いてみたかった線ですね。

青山 ダイナミックな軌道の動きもそうですが、私たちが一番驚くのは掛軸です。伝統的な表具の形をしているのに全面に銀箔を貼って、風帯まで銀なのに、非常に目をはかれます。これはご自身の発想ですか？

岡村 表装は表具師さんと作品を交えて話し合いながら決めています。これとは別の作品できっかけとなる掛軸の作品があるのですが、そこらは偏光箔といって、見る角度によって光が変わるキラキラするものを使用しました。それに対して物質感を出したかったので表装に箔を用いた掛軸を制作しました。銀箔ではなく、今回は錫箔とプラチナ箔を使っています。そういった金属の質感を出したかったのが発想のきっかけですね。

青山 毎日新聞に《orbit》の紹介原稿を書いたのですが、うっかり銀箔と書いてしまいました。

岡村 表具が今月の頭に仕上がってきたのですが、当初は全面でプラチナ箔を使う予定でした。箔の質感の変化や見え方の違いが面白いと思って、中廻しという作品に近い部分をプラチナ箔に。箔のサイズが違うのでわかると思います。天地と呼ばれる部分には錫箔を使っています。

青山 こちらの画面は銀やアルミの箔で、《木漏れ日》と同様、砕いた箔を使っていますか？

岡村 はい。全面に銀箔に着色したブルーの箔を貼っていて、それは元々マーブルを着色しているのですが、一点一点選定してランダムに見えるよう美しく配置しています。そのうえからさらにマーブル模様、偶然にできる形を自分で加工したものを再現しています。

青山 この作品は特に、伝統的な日本の床の間に掛けても、現代的なホワイトキューブの展示室に掛けても不思議とじっくりくる、過去と未来をつなげる作品ではないか

と思います。この「orbit」シリーズが最も新しい作品ですか？

岡村 二〇一三年から宇宙のシリーズを描いた中では、「orbit」が一番、最新ですね。

青山 今回、日本画の枠を超えたような作品を出している作家としてご紹介しました。展覧会に誘われた時のお気持ちを。

岡村 逆襲という言葉にすごくひかれました。単純に選んでいただけですごく嬉しかったですね。

青山 今回の三点はすべて新作です。見ていただきたいところは？

岡村 どの作品もそうですが、『木漏れ日』の作品も箔を使っていて、自然光を意識した作品になっています。なので、見る角度、少ししゃがむと光の反射が異なるので、そうしたところも鑑賞していただきたいと思います。「orbit」シリーズの特に白い部分は反転して、ブラックホールのような感じになるのをすごく意識しています。今は一点照射ですが、そういったものを感じていただくと嬉しそうです。

青山 自然光でも見てみたいです。

岡村 形をとめない時間によって変化するものを描きたいと思っています。来年の三月に高島屋で発表する予定でテーマは「愛」で考えています。

会場からの質問 箔を使うときは「砂子」のような形で使っていますか？

岡村 そうですね。

